

聖書：I サムエル 13：1～23

説教題：主が求められる人

日時：2016年6月26日（夕拝）

この13章からいよいよイスラエルの初代王サウルの働きが記されて行きます。まずここに書かれているのはペリシテ人との戦いです。このペリシテとの戦いこそ、神がサウルを王として立てた目的でした。9章16節：「あすの今ごろ、わたしはひとりの人をベニヤミンの地からあなたのところに遣わす。あなたは彼に油をそそいで、わたしの民イスラエルの君主とせよ。彼はわたしの民をペリシテ人の手から救うであろう。民の叫びがわたしに届いたので、わたしは自分の民を見たからだ。」

サウルはこのためにイスラエルから3000人を選びます。その内、2000人は自分の下に、残りの1000人は息子ヨナタンの下に配置しました。まず成功したのは息子ヨナタンです。3節に「ヨナタンはゲバにいたペリシテ人の守備隊長を打った」とあります。このことがペリシテ人を怒らせます。そして恐ろしい数の軍隊が攻めて来ます。5節に、集まったペリシテ人は戦車三万、騎兵六千、それに海辺の砂のように多い民であったとあります。

この結果、イスラエルの民はひどく圧迫されます。彼らは自分たちが危険なのを見ました。そして命からがら逃げ回ります。ほら穴、奥まった所、岩間、地下室、水ための中にまで。ある者たちはヨルダン川を東側へと渡ってガドとギルアデの地へ逃げて行きます。そして残った者はみな震えながらサウルに従っていました。なぜこんな状態に彼らがあったのか、その理由の一つが19節以下から分かります。当時、イスラエルの地のどこにも鍛冶屋がいませんでした。それはペリシテ人が許さなかったからです。それほどペリシテ人がイスラエルの上に圧倒的支配権を持っていたのです。そのためイスラエル人は鋤やくわや斧やかまをとぐためにもペリシテの地へ下って行かなければなりません。そしてそのたびに料金を取られてしまう。そのため誰の手にも剣や槍がなかったとあります。ただサウルとその子ヨナタンが持っているだけ。これでは一体どうやって互角に戦うことができるのでしょうか。ペリシテ人が本気がかかって来たら到底勝ち目はありません。民が穴を見つけては逃げ隠れ、またサウルのもとにとどまった者もブルブルと震えが止まらなかったのも、なるほど良く分かります。

しかしサウルには 10 章 8 節の約束がありました。預言者サムエルはサウルにこう言っていました。「あなたは私より先にギルガルに下りなさい。私も全焼のいけにえと和解のいけにえとをささげるために、あなたのところへ下って行きます。あなたは私が着くまで七日間、そこで待たなければなりません。私があなたのなすべき事を教えます。」そこでサウルは今日の章でギルガルへ行きます。そして言われた通り、七日間待ちます。ところが七日待ってもサムエルがやって来る気配は一向にありません。こういう状況の中で人々がサウルから離れて行こうとする動きが見られ始めました。その結果、最初は 3000 人が一緒にいたのに 15 節を見ると 600 人にまで激減したことが分かります。その時、サウルはどのようなのでしょうか。彼は何とかこの動きを止めよう、変えようとして「全焼のいけにえと和解のいけにえを私のところに持って来なさい。」と言います。そして自らのリードで、まず全焼のいけにえをささげた。そうしたところ、そこへサムエルが到着します。そして「あなたは、なんということをしたのか。」と断罪されます。そして「あなたの王国は立たない！」とまで宣言されてしまう。これからサウル王朝が始まろうとして、まだスタートしたばかりなのに、もうここであなたの国は立たない！と言われてしまう。

一体何が問題だったのでしょうか。サウルの子は何だったのでしょう。それはサムエルの言葉にはっきり示されています。13 節 14 節で 2 回繰り返されて強調されていること。それは 13 節によれば「主が命じた命令を守らなかった」ということです。14 節の言葉で言えば「主の命じられたことを守らなかった」ということです。先に見たように、サウルに告げられていたことは、ギルガルへ行って、そこでサムエルを通して語られる主の指示を待つようにということでした。その指示に従って主の戦いを戦うようにということでした。しかしサウルは従いませんでした。最初はこれに従うつもりで行動し始めたのでしたが、刻一刻と変化する状況の中で、ついにはこの命令を投げ捨て、自分の考えに従って行動する道を選んだのです。

なぜサウルは主の御言葉に従わなかったのでしょうか。彼は 11～12 節で三つの理由を述べています。まず一つ目に彼が言っていることは「民が私から離れ去って行こうとした」ということです。ただでさえ戦況は厳しく、危険な状態へ変化しているのに、民がどんどん離れ去って行く。一人また一人と去って行き、見る見るうちにその数が激減するのを見ることは残っている者たちに非常に焦燥感をもたらしたでしょう。何とかこの動きを食い止めなければ！何とか士気を高めて、彼らをつなぎ止めなければ！そのよ

うにサウルは駆り立てられたのです。

二つ目の理由は「あなたも定められた日にお見えにならなかった」ということ。この彼の言葉を聞くと、私たちはサムエルに非があるのではないかと思います。彼が遅れて到着したことが問題なのであり、彼はサウルを責めるより、むしろ謝るべきだったのではないかと、とも思います。しかし 10 節は何を意味しているのでしょうか。サウルが思い切って全焼のいけにえをささげ、まだ次の和解のいけにえをささげていない時、すなわちこのことを始めて間もなくサムエルがそこに来た。つまりサウルがこのことをした日にサムエルは来たのです。確かに七日目になってもサムエルは到着しなかったのでサウルはこのことをし始めたわけですが、結局その日の内にサムエルは来たということではないのでしょうか。

そして三つ目にサウルが言っていることは、「ペリシテ人がミクマスに集まり、今にもこのギルガルに下って来ようとしているのを見たからだ。」ということです。もはやギリギリの瀬戸際まで追い込まれており、次の瞬間には攻め込まれようとしている。だから私はこのことをしたのです！そうするより他なかったのです！とサウルは答えています。

このサウルの言葉を聞くと、私たちは同情したくなるものです。誰がこの状況で耐えられるだろうか、私も彼の立場にあつたら同じように行動したのではないかと。そう彼を弁護したくもなります。しかし問題点はまさにそこにありました。それはサウルは刻一刻と変化する状況の中で、その状況に飲み込まれてしまったということです。周りの状況ばかり見つめて、そのために主への信頼をどこかに投げやってしまったということです。私たちがもしサウルが置かれた状況では、彼のように行動してしまうのもやむなしとこれを肯定するなら、それは何を意味するでしょう。それは状況が変われば信仰を保ち続けられないのも当然だという考えでしょう。私たちの信仰とはそういうものなのでしょうか。状況が厳しくなったら捨てても当然のものなのでしょうか。反対から言えば私たちの信仰とは、置かれた環境が良い時だけ保ち得るものなのでしょうか。もしそうなら、そんな信仰を持っていることにどれほどの意味があるのでしょうか。むしろ困難な状況でこそ、信仰は私たちの慰めと力になるべきものなのではないのでしょうか。

参考になるのはイスラエルが紅海を背にしてエジプト軍に追い詰められた時のこと

です。あの時、イスラエルの後ろにあったのは海でした。逃げ道はありません。絶体絶命のピンチです。そういう状況では信仰に生きることはできないのでしょうか。そうではありませんでした。神は何と彼らの後ろにあった海を真っ二つに分け、乾いた地をそこに作り、そこをイスラエルに進ませられました。厳しい状況に至ったら信仰はやめなければならないわけではない。そこでも神に信頼し、従い、神の導きを待ち望むのが信仰の道でしょう。

注目に値することは、サムエルが到着した時、彼はサウルに「ゴメン！ゴメン！」とは言っていないことです。「遅くなって申し訳なかった」とは言っていない。むしろここに見るのはサウルが最初のいけにえをささげ終わったちょうどその時に、サムエルが現われたということ。あと数時間サウルが待てたら！と悔やまれるところですが、これは逆に考えれば絶妙なタイミングだと思わないでしょうか。このことはこれらの出来事すべてが神のタイミングのもとにあったことを示しているのではないのでしょうか。つまりこれはサウルに対する信仰のテストだったのです。神の力が足りなくてサウルを遣わすのが遅れたのではない。神はここにおられてすべてを導き、サウルの信仰とその忠実さを試みておられたのです。

ある人は、それにしてもこのこと一つでサウルの王国は立たないとされるのは少し厳し過ぎないかと言うかもしれません。サウルは大体は神に従った。御言葉に従ってギルガルにやって来た。7日目までも待った。あと少しのところまで来て、つい弱さのために、焦っていけにえをささげてしまっただけではないか。こんな小さなことを主は問題にして、こんなにも大きくさばかれるのかと。しかし私たちが小さなことと考えることは、実は神の前では重要な意味を持っているものです。その小さなことが、実はその人の全体を現わしている。その人がどういう人であるかが、実は小さなことに端的に現れるのです。この小さなことで明らかにされたサウルの性質とは、真心からは主に献身していないということです。状況が良い時は主に従っても、重大な局面では主を信じず、自分の考えで行動する。そうする人はこれからも大切な場面でそうするでしょう。ですからこれは小さなことではないのです。これはその人全体を現わしていることなのです。このためにあなたの王国は立たないとサウルは言われてしまいます。主はご自分の心にかなう人を求め、その人を君主に任命しておられると。ここでサウル自身が王位から降ろされたわけではありません。ただサウル王朝は立たない、今後、王朝の祝福は主の心にかなう人に移されると言われたのです。

この章の残りの部分では、イスラエルが置かれた厳しい状況が描かれています。サウルとともにいる者は600人となり、最初の五分之一にまで減ってしまいました。それに対してペリシテ人はいよいよ戦闘の準備に入っています。三つの組に分かれて、いつでも攻め入ることができるようにスタンバイしています。対するイスラエルは武器がありません。剣も槍もありません。これはイスラエルはもう終わりということでしょうか。これはイスラエル滅亡の序曲なのでしょうか。主はもうここにおられず、イスラエルの望みは完全に断たれたということでしょうか。

しかし次の14章を読むと、イスラエルは何とこの状態からペリシテ人を敗走させるのです！そのためにサウルの息子ヨナタンが大きな役割を果たします。信仰に生きる一人の器を通してまさかの展開が生じて行きます。その主の奇しい導きが現われるための背景・準備として、この13章後半の記述があるのではないのでしょうか。ですから私たちは目に見える状況に心奪われて、人間的に悲観的な決断を下してはならないのです。目の前の状況を見つめつつも、それを打ち破って新しい道を開くことができる神を見上げて、その方への信頼を、みことばに忠実に従う歩みに現わし、告白して行くべきなのです。

今日の御言葉は私たち一人一人に問いかけています。状況が厳しくなったら、あなたは主の御言葉に従うのをやめるのか。従いやすい状況でだけ主に従い、そうでない困難な状況になったら主に従わないのもやむなしとするのか。今日の御言葉から教えられることは、信仰とは大体従えば良いというものではないということです。心を半分、主にささげれば良いのではない。どんな中でも主に一つ心で信頼し、主の御言葉に従う歩みをする人。それこそ主が求められる人であり、主の心にかなう人なのです。私たちがこの週、どんな状況に置かれても、それは主がおられないからではない。主はそこに常におられて私をテストしておられる。その主を見上げて、私たちは主にこそ信頼している自分であることを、御言葉に従う歩みに表したいと思います。状況の変化によって信仰も変わったり、あるいは大体従っていれば良いとするのではなく、真心から主に信頼し、御言葉に従う歩みをささげられますように。そういう者を主は祝福してくださいます。私たちはその信仰のテストを乗り越えて、その先に主が用意してくださる豊かな祝福にあずかる歩みへ進んで行きたいと思います。